

電子体温計の研究 西山豊著 (化学工業図書館)

1993/05/24 化学工業日報 8ページ 803文字

"頭が痛い、熱を測ってみよう。おや、38度5分もある。今日は会社を休んでゆっくり寝ていよう"。誰もがこのような経験を持っているが、お気付きのように体温計で示された温度に何の疑いも持っていない。健康のバロメータとなる体温だが、もしこの体温を測るための体温計が正確でなかったら-本書はこのような疑問が発端となり、約6年間の歳月を費やした調査研究を中心に87年に発表した論文。JIS規格の制定や計量法改正などをめぐる動きをまとめてある。

コトの始まりは家族全員が風邪をひき、治癒したにも関わらず、「性能のいい」はずの電子体温計は、微熱がある数値を提示。もしかしたら微熱があるのではなく、電子体温計に問題があるのでは-と考えたことからだった。

電子体温計には「実測方式」と「予測方式」の2種類があり、過去、体温計の代表であった水銀体温計と実測方式はほとんど同じ機能である。問題は「予測方式」。十分な時間をかけなければ測定できないはずの「平衡温」を、約1分で測ることができる。初めの温度の上昇カーブから10分後の予測をするこの方法の誤差は、上下0.2度。著者はこのような落とし穴を、42人の女性と協力して婦人体温計についても調査、メーカーへの問い合わせやその返答、誇大広告に関する疑問を投げかけたりと、電子体温計に関する研究の著者の足跡、また、本書刊行の動機が十分に伝わる内容となっている。著者は現在、大阪経済大学助教授だが、専攻が数学ただけに綿密なデータを駆使しながらも理解しやすい内容となっている。

社会問題の引き金ともなった本書は、電子体温計についての知識を得る格好の書であり、一方で1つの研究を続けていくことで、その切り口がいつしか大きく、広い知識となることを実証した好例ともいえる。

(A5判、300頁、4944円・税込み、法律文化社刊、京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71、電話075-791-7131)